

黒^ヘ石^{イシ}

新宿鮫
XII

装丁 西村弘美
装画 御法川哲郎

「時下、ますます御清栄のことと存じます。また平素は、当会に情報を御提供いただき、ありがとうございます。ごさいます。会員諸氏の御協力により、当会は発展をつづけて参りました。

さて、今般の社会状況を鑑み、当会もシステムをバージョンアップさせたいと考えます。

目的は、会員諸氏の力を結集した、効率のよい収益事業の展開です。従来のネットワーク方式を一元化させ、情報の伝達速度を速めて、より迅速な活動につなげるのが狙いです。

会員諸氏の御賛同を得られるものと確信しております。

御賛同をいただけるのであれば、返信は不要です。御賛同いただけない場合のみ、お知らせ下さい。御理解をいただくべく、面談にうかがいます。ただし会員の健康に問題あり、と判断されるときは、その限りではありません。

末尾ながら、会員諸氏の今後の発展を祈念いたします。」

「 近来天气多变化，望诸位一切平安顺心。在此首先感谢诸位平日多方提供情报。正因为有诸位会员之力，本会才得以发展至今。

有鉴于当今社会潮流变化，本会接下来将进行系统升级。升级主要目的为方便统合诸君之力，推展高效率、高收益之新事业。未来新系统会将联络网整合为单一窗口，提升情报传递速度，让诸位得以迅速采取行动。

相信此提案必能得到诸位会员支持与赞同。

若赞同则不必回复此信。若有任何异议则请务必通知。本会将会派人进行面谈，务求加深理解。惟该会员经本会判断有健康上疑虑时，则不在此限。

在此祝福诸位会员事业发展更上一层楼。」

2

たっぷりと湿気を含んだ空気が肌にまとわりつく晩だった。気温は三十度あるかどうかだが、まったく風がなく、駅から自宅マンションに歩くだけで、鮫島さめじまの背中を汗が伝った。

九月に入っていたが、暑さに苦しめられているという点では、八月より厳しい。自分の部屋に帰りついたら、エアコンを最強にしてバスルームに飛びこむ。シャワーを浴びている間に部屋が冷えることを願う。

タイマーで前もってエアコンを動かすことも可能だが、事件が起これば定時には帰れないし、場合によっては泊まりもある。だから不在時にタイマーを使ったことはなかった。

マンションが面した一方通行の路地に入ったとき、五メートルほど先の自販機のかたわらに立つ男の姿が見えた。放たれる光から顔をそむけるようにして、こちらをすかし見ている。

二年前、かたわらのコインパーキングに止めた車から降りてきた中国人の殺し屋に銃撃されたことがあった。

鳩尾みぞおちにさしこむような緊張を感じた。特殊警棒は懐とに留めていたが、拳銃はもっていない。

殺し屋の放った銃弾は、鮫島を取材しようと飛びだしてきた記者の背中に当たった。鮫島は殺し屋を撃った。記者も殺し屋も命をとりとめた。

男が一步踏みだし、顔が見えた。自販機のガラスに貼られた水滴のシールを通した光が横顔を青く染めている。スーツを着け、ネクタイを締めていた。

「鮫島さん。ごぶさたしています」

矢崎やさきだった。最後に会ったときより二キロは痩せただろう。尖とがった顎あごとくぼんだ目もとに、以前はなかった陰がある。

昨年の秋、覚醒剤の仕分け場だという密告をうけ、北新宿のマンションを内偵していた鮫島はそこで男の射殺体を発見した。矢崎はその直後に、機動隊から新宿署生活安全課に転属してきた。新任の阿坂あさか課長は、鮫島に矢崎とコンビを組むよう命じた。任務は捜査にあたる本庁一課への情報提供だ。

が、新宿署に捜査本部がおかれるより早く、事件は警視庁公安部にとりあげられた。理由は明されなかった。鮫島と矢崎は現場となったマンションの捜査をつづけ、殺された男が、北朝鮮とつながりのある中国人密輸業者であったことをつきとめた。そして殺された男との関係が疑われる新橋しんばしのワイン輸入販売会社の従業員の行動確認中、矢崎は何者かの襲撃をうけ頭部に重傷を負った。

その捜査の過程で、矢崎が機動隊に所属していなかったことが発覚した。矢崎の本当の所属は公安部公安総務課で、北朝鮮工作員の動向に関する情報を得るため、鮫島につけられたスパイだった。

身分の発覚以降、矢崎は休職していたが、今年の四月に転属になった。転属先は本庁警備部の災害対策課だと、鮫島は阿坂課長から聞かされていた。

鮫島は矢崎を見つめ、次にあたりを見回した。その意図を察したのか、
「俺ひとりです」

と矢崎はいった。そして、

「その節せうはご迷惑をおかけしました」

と頭を下げた。

「災害対策課だと聞いていたが、戻ったのか」

鮫島はいった。連絡もせずに会いにくるというのは、いかにも公安総務の人間がやりそうなことだった。携帯電話に着信記録を残したくないのだ。

「戻ってはいませんが、ですが、まだかたづいていない案件がありまして」

矢崎は低い声でいった。

「それで俺に会いにきたのか」

矢崎は頷いた。

「どのツラ下げてきたと怒られるのは承知の上です。少し、お話をさせていただけませんか」

鮫島は息を吸いこんだ。自宅はすぐそこだが、熱気がこもった室内で向かいあえば、より不快感が増すだろう。短期間ではあったが、矢崎を優秀な新人だと感じ、鮫島は信頼していた。

「君にそれほど怒ってはいない。が、狡猾なやり方で情報を得ようとした連中のことは許していない」基本を守る、ルールに忠実であるというのが信条の阿坂課長が公安部に抗議するということを止めたのは鮫島だった。自分の手で公安部の鼻を明してやりたいという鮫島の気持を酌み、殉職した桃井への敬意だとして、阿坂はそれを受け入れた。

その結果、鮫島は公安部が血眼で捜していた物資を発見することに成功した。同時に、物資の強奪を企てていた元北朝鮮工作員を逮捕した。工作員は日本で五件以上の殺人に関与したと目されているが黙秘を通し、裁判は現在もつづいている。

「ありがとうございます」

矢崎は鮫島を見つめた。喉仏が動いた。

「殴られてもしかたがない、と腹を決めてきました。新任の自分に、鮫島さんはよくして下さいました。ずっとひとりですべてやってこられた方なのに」

「その話はよそう。君を優秀だと感じたからだ。優秀なものには理由があったわけだ」

鮫島はいつて、踵かかとを返した。

「駅の近くにカラオケボックスがある。話をするならそこがいい」

「カラオケボックスですか？」

驚いたように矢崎はいつて、急ぎ足でついできた。

「俺の部屋は暑くて、ゆっくり話せるような状態じゃないし、君を上げるのも抵抗がある」

「すみません」

平日の午後八時過ぎということもあり、カラオケボックスは空すいていた。煙草たばこの匂いがこもった個室で、鮫島は矢崎と向かいあった。二人ともノンアルコールビールを注文した。

エアコンを入れると、狭い個室はすぐに涼しくなったが、湿度は高いままだ。届いたノンアルコールビールを飲み干し、追加を頼んだ。

「話を聞こう」

「高川和たがわわさみです。仲間うちでは黄フアン」

矢崎はいつた。

「田町たまちで君を殴った男だな」

矢崎は頷いた。

「その件では執行猶予になりました。前歴がなかったので」

「逮捕されたことがないというだけだろう。金石ジンシのメンバーだ。何かやっている」

「自分もそう思います。取調べなどを通して、高川と話をするようになりました。自分は覚えていませんでしたが、外二時代に通訳としてひっぱりだされた中国人情報提供者の席で、短時間ですが同席したことがあったようです。私と顔の似た先輩が地元のマル走にいて、それで高川は覚えていたのだそうです」

マル走とは暴走族のことだ。

「高川もマル走だったのか」

矢崎は再び頷いた。

「その先輩が単車の事故で死に、恐くなって足を洗ったと話しました」

「なるほど」

「高校を中退していたので、造園会社に就職し、子供のいなかった社長から引き継いで今があるそうです。もちろんそれは上辺で、裏では金石と中国の覚醒剤取引からんでいると見ているのですが……」

「金石の連中は口が固い。それに取引相手だった陸永昌が中国に戻った以上、簡単にはおさえられないだろうな」

陸永昌を逃す羽目になったのは、「東亜通商研究会」という、内閣情報調査室の出先機関に身を置く香田の妨害のせいだった。殺人を犯した陸を「国益のためだ」と香田は体を張って逃がした。

「正直、公安では覚醒剤の件など、どうでもいいという感じですよ。金石も、たまたま陸の取引先だったというだけの扱いですし、『東亜通商』については、名前をだすのものはばかられるような空気です」「なぜだ？」

「公安は公安で、情報収集に関してはトップだというプライドがあります。内調の出先にかき回されたというのが許せないようです」

「公安を卒業した人間もいるのにか」

「卒業すれば他人です。仕事の話をすることもない。刑事とはそこがちがいます」
公安警察と刑事警察の差だ。公安警察は現役の人間しか信用しない。

「それで高川がどうしたと？」

「鮫島さんは警視庁で最も金石に詳しい方だと思うのですが、八石はっせきというのをご存じですか」

「八石？ 八つの石と書くのか」

矢崎は頷いた。

「いや、まったく聞いたことはない」

鮫島は首をふった。

「金石というのが、中国残留孤児二世、三世のメンバーを中心にしたネットワークであるのを、高川から私も聞かされました。日本人や中国人も所属していて、犯罪だけでなく一般ビジネスや生活に関する情報をやりとりする、一種の互助会のような機能も有しているそうです」

「それは知っている」

「ネットワークなので、上下関係というのは特にはないのですが、顔が広く、メンバーのハブとなるような人間が八人いるというのです」

「だから八石か」

「はい。高川もそのひとりだそうです。八石には、交流がある者もない者もいて、ネット上のやりとりでしかコミュニケーションをとっていないという存在もあるそうです」

それは理解できた。金石には目に見える形での組織は存在しない。AとBは親しいが、BとつきあいのあるCについてAはまるで知らなかったりする。利益につながるというので、BがAとCを引き

合わせることもあるが、それがDやEといった具合に広まってはいかない。金石には犯罪とは無関係に暮らしている人間もいる。したがって、ごく近い仲間をのぞけば、名前や顔を知らないメンバーも多い。

「家が近所で、よく顔を合わせているのに、お互いに金石だと知らないこともあるようだ」

鮫島はいった。それが捜査を難しくしている理由だった。職業犯罪者である金石のメンバーを追跡していても、カタギのメンバーが壁となって、その先のつながりに進めなくなるのだ。あるいはインターネット上のやりとりだけで、名前や住居を知らずに仕事をおこなっている。

「八石には独自のつながりがあつてネット上でやりとりをしているようです。高川が直接知っている人間は三人だけで、残りの四人については噂か、噂すら聞いたことがないと」

「ネット上でどんなやりとりをしているんだ？」

「主に、ビジネスに関する情報交換のようです。カタギの仕事だろうが犯罪だろうが、ひとり、あるいは自分の周囲だけでは実行が難しい金儲けの情報^{かねもち}をあげ、協力者を求めたりしているようです。八石の周囲にはそれぞれ、二十人から三十人のメンバーがいるので、ざっと二百人以上のコネクションを動員できるというわけです」

おそろくその半数はカタギだろう。金石が暴力団と大きく異なるのは、カタギの協力を仰げる点にある。

暴力団は内に対する結束力は強いが、外部への影響力に弱みがある。暴力団排除条例のせいで、まっとうな会社は組まないし、銀行口座を開くような、カタギの人間なら何でもよいような作業すら難しい。やろうとすれば、カタギに大金を積んで頼むか、逮捕覚悟で正体を偽る他ない。それは暴力団員の家族であつても同様だ。

みすみす金儲けになると知りながら、カタギの協力が仰げないという理由で指をくわえざるをえない暴力団員は多い。

それに嫌げがさして組を抜ける、足を洗うという者もいる。だからといって世間がすぐにカタギと認めてくれるわけではない。

組の庇護を失ったことでよけいに困窮し、強盗や窃盗といった犯罪に走ったりする。暴力団排除条例は、暴力団員の数を減らしてはいるが、犯罪そのものを減らしているとはいい難い面もある、と鮫島は考えていた。

「極道が涎をたらすような話だ」

鮫島はいった。

「そうなのですか」

公安が長い矢崎には理解できなかったようだ。鮫島は簡単に説明した。

「なるほど。カタギを動かせるというのは、そんなにおいしい面もあるんですね」

ノンアルコールビールのグラスから落ちた水滴をぬぐって矢崎はいった。

「犯罪者とカタギが混在していて、密接につながってはおらず、プロジェクトごとにくつついては離れる。ある仕事はいっしょにやっても、次の仕事ではまるで別の人間と組み、過去については忘れてしまう。いわば『金石』という合言葉だけでつながった集団だ。どこまで広がりがあるのか、おそらく知っている人間はいないのじゃないか」

鮫島がいうと、矢崎は頷いた。

「そういえば、そんなことを高川からも聞きました。実際、何人が金石に所属しているのか、自分にもわからない。もしかしたら、もう千人とか二千人とかになっっているかもしれない、と」

「だがその八石を全員押さえれば、全体像をあるていどつかめる筈だ」

「だからか」

矢崎がつぶやいた。

「だからとは？」

「高川が怯おびえているんです」

「怯おびえている？」

鮫島は矢崎を見つめた。

「ええ。自分を保護してほしいと、今朝、電話でいつてきました。保護してくれるなら、これまでの犯罪について話してもいい、と」

「誰から保護するんだ？」

「おそらく、八石の誰か。複数のメンバーかもしれませんが」

「なぜだ？」

「金石を支配しようとしているメンバーがいるようなのです」

矢崎は答えた。

3

翌日出署すると、鮫島は阿坂に時間を空あけてほしいと頼んだ。原理原則を重んじる阿坂はイレギュラーな行動を嫌う。いいたいことは、課の会議で全員の前で話せというスタンスだ。

「何でしょう」

パソコンのモニターから目を離すことなく阿坂は訊ねた。手はキーボードを忙しく叩いている。老眼鏡がモニターの光を反射していた。

「昨夜、自宅の前で矢崎くんが待っていました」

阿坂の手が止まった。鮫島を見た。

「二時半から三時までなら時間がとれます。どれか会議室を押さえておくので、そのときに」
感情を読みとらせない声でいった。

「ありがとうございます」

小さく頷きモニターに目を戻しかけて、阿坂は訊ねた。

「元氣だった？」

「痩せていました」

「そう」

阿坂は答え、手が再び動きだした。

時間になると、鮫島は阿坂と会議室で向かいあった。矢崎が公安総務からの出向であったことを、生活安全課の他の人間は知らない。

捜査中に受傷し休職のうちに、本庁警備部に転属したと多くの者が信じている。短期間で新宿署を離れ本庁に移ったことに不審の念を抱いた者もいたかもしれないが、それを鮫島にぶつけた人間はいなかった。

「矢崎くんは古巣を手伝っているようです」

鮫島は告げた。

「公安総務？」

「ええ。彼に怪我を負わせた高川の裁判の件などもあって、災害対策課は仮の配属だったようです」
「直接戻すのでは形が悪いと思った人間がいたのね。それであなたに会いにきた理由は何ですか？」

「金石の件です。簡単にいうと、金石内部で権力争いが起きていて、高川は不安を感じている。これまでの犯罪について話すので、警察に保護してもらいたいと矢崎くんにいつてきたそうです。狙いはおそらく司法取引で、自ら供述することで減刑と保護の両方を求めているようです」

「ところが公安総務は、高川の告白には興味がない。覚醒剤の密輸などどうでもいい。そこで矢崎くんはあなたに話を振ってきた」

「おっしゃる通りです」

阿坂の鋭さに、鮫島は内心舌を巻いた。

「金石については、あなたから聞いた以上の情報がわたしにはありません。ですが非常に結束が固いという話で、メンバーの高川が警察に保護を求めるといふには違和感もちます」

「それもおっしゃる通りです。ですが、高川から話を聞くだけ聞いてもいいのではないかと考えています」

「その許可を、わたしに求めているということですか」

阿坂はわずかに目をみひらいた。

「できる限り課長の方針に従うつもりです」

阿坂は苦笑した。

「妙ね。鮫島さんにそういわれると、むしろ心配になる。どこまでわたしの方針に合わせてくれて、どこから離れていくのだろう、と。知ってる？ わたしとあなたがいつ全面衝突するかを楽しみにしている署員がけっこういる」

口もとに笑みを残したまま阿坂はいった。

「初耳です。誰がそんな話を課長に？」

「女性の味方は女性」

それで合点がいった。男性警官なら口が裂けてもいわない話を、女性警官から聞いたというわけだ。鮫島は微笑み返した。

「それは心強い」

「そのことはおいといて。高川は公安と取引したい。そこにあなたがでていっても話をするかしら」
「嫌がるならそこまでです。金石について情報をもつ警察官は多くありません」

「公安なら取引に巻きこめると考えた高川の勘は合ってるわね。ただ高川のもつ情報は公安には価値がない」

「金石には八石と呼ばれる、ネットワークのハブが八人おり、高川はそのひとりで、八石のうちの誰かが、これまでのネットワーク型から上意下達方式の組織に金石を変えようとしている、というのです」

「そんなに簡単にいくものなの」

「抵抗は予想されます。その場合、殺害による排除も考えられると」

「誰が殺人をするの？ 八石のうちのひとり？」

「そこまではわかりません。ただ金石には、そうした行為に長けた人間がいます」

「千葉の元組長殺しね」

鮫島は頷いた。姫川という元組長夫婦が、飼っていた犬四頭とともに撲殺され自宅敷地内に埋められていたのを発見したのは鮫島だった。

「金石にはほとんど犯罪に関係していない人間もいれば、簡単に人を殺すような者もいます。ですがそ

の全容を知る者はひとりもない。組織を一元化すれば、そうしたプロも簡単に動かせるようになる」
「動かせるから、一元化しようとしているのじゃなくて？」

鮫島は阿坂を見つめた。阿坂は言葉をつづけた。

「クーデターを起こそうとする者は、まず軍と警察をおさえる。どちらも武器をもっている暴力装置だから」

「金石にはこれまでクーデターの対象となるような権力者がいませんでした。八石と呼ばれるハブの中にも、互いの顔や名を知らない者がいるようです。もしそのひとりが暴力装置を動かし、組織を支配しようと考えているなら、横のつながりしかもたないメンバーは対抗するのが難しくなります」

「でも互いに顔や名を知らないなら、組織から逃れることもできる。そんな金石に別れを告げて。そうさせないためには、暴力装置だけじゃ足りない。アメも与えないと」

阿坂の言葉に、鮫島は視界が明るくなったような気がした。

「そうか。それで高川は腹を決めたのか」

「何のこと？」

「クーデターをしかけた人物は、アメとして他の八石やメンバーたちに利益を約束する。とはいえマトモな手段で利益を簡単に増やすのは難しく、当然それは非合法な手段で得たものになる。高川は陸永昌とのつながりで、中国からもちこまれる覚醒剤に触っていた。おそらく中国と日本の暴力団の仲立ちです。そのビジネスを奪われるという危機感を抱いたのではないでしょうか」

「なるほど。専売特許だった覚醒剤ビジネスを、ボスになろうとしている人間にもっていかれるかもしれない。逆らえば殺される。そこで、すべてではないかもしれないけれど自分のビジネスコネクションを警察に明すことにした。奪われるくらいなら潰してやろう、と」

「可能性は高いと思います」

「高川が公安じゃなく、あなたとの取引に応じた場合、これまでの金石の犯罪についても話すかしら」

「話すとしても、ごくわずか。たとえば新しいボスになろうとしている人間の犯罪、あるいは動かししている暴力装置が過去に犯した殺人などでしょうか」

「それが引きだせれば十分でしょう」

阿坂はいつて、鮫島を見つめた。

「高川に接触して下さい。必要なら、公安総務にわたしが頭を下げてもいい」

「課長——」

「連中の鼻を明すためなら、つまらないプライドは捨てる。もう一度、矢崎さんとコンビを組むことになっても抵抗はない？」

「ありません。だまされたのは事実ですが、彼は優秀です」

「あなたがそういうのなら、まちがいはないでしょうね」

阿坂は微笑んだ。

4

ヒーローである自分にとって、この世界は出番に満ちている。だが大切なのは、ヒーローであると、決して人には知られてはならないことだ。

目立たず暮らす方法のいくつかを彼は実践している。まず、人の多い場所では暮らさない。といっ

て野なかの一軒家も駄目だ。最近は人里離れた場所にぼつんとある家を取材するようなテレビ番組もある。こんな場所で何をして暮らしているのだと興味をもたれたら最悪だ。

「実はヒーローなんです。それを隠すため、ここで暮らしています」

翌日からマスコミが押し付けてくるだろう。これまでの活躍を知りたがるにちがいない。絶対に駄目だ。

だからそこそこの田舎いなかに限る。集落の中にあつて隣近所もいるが、家の敷地が広いので出かけない限り他人と顔を合わせることはない。

次に正業をもつ。あの人の仕事は何なのか、と疑われない正業だ。サラリーマンが目立たないと思うかもしれないが、それはちがう。

毎日ネクタイを締めて出勤していれば、確かにサラリーマンだと思ってもらえるかもしれないが、関心はそこでは終わらない。

「どんな会社にお勤めなの？ 大きいところ？ どこかの工場？ それとも事務職？」
「適当な社名をいってごまかそうとする。」

「あら、それだったら、知り合いが同じ会社にいます。知りません？ 名前は——」
そんな展開になつたら危険だ。サラリーマンは駄目だ。自営業がいい。とはいえ、自営業はさまざま。説明せずにすむのは弁護士とか税理士、司法書士などが、今度は仕事をもちこまれる可能性がある。それに何より資格をとらなければならない。ヒーローの自分には資格をとるくらい簡単だ。人並み外れた頭脳と体力がある。

とはいえ、勉強はヒーローの生活をむしろ、出番を奪う。そんなのは本末転倒だ。ヒーローであることを隠すためにヒーローとしての活躍ができないなんて。

商売だが、行きずりの客はこない。きても断われて、同じ客がくりかえしこないような商売がいい。その点で、今の仕事に彼は満足していた。店舗と作業場がいっしょになっていて、前を通りかかった人間は、何の商売であるかひと目でわかる。といって、ふらりと入ってこようとは決して思わない。しかも便利なことに、この作業場ではヒーローの仕事に役立つ武器が作れる。作って使って、その後は消してしまえる。

ヒーローであるから、さまざまな武器の扱いに彼は精通している。嫌いなのは銃だ。入手が難しい、所持していると人に知られれば厄介やっかいなことになる。次に嫌いなのは刃物だ。

刃物はまだ厄介が少ない。包丁やカッターナイフをもっていない人間はいない。だがもち歩いているとなれば別だ。料理人や作業員だと説明する必要がある。それに刺す切るは、撃つよりはマシだが、ヒーローとしての達成感に欠ける。

その点で、作業場で自作する武器に彼は満足していた。独創的だ。ヒーローは皆、独創的な武器をもっている。銃やナイフはただの道具に過ぎず、達成感は決して得られない。

その武器を鞆なげんに入れてもち歩いていても、人は驚かない。むしろ仕事の説明にもなつて一石二鳥だ。一石二鳥。この比喩がおかしくて彼は笑った。すばらしい。自分のためのような言葉だ。

5

阿坂が公安部公安総務課にどのような働きかけをおこなったのか鮫島は知らない。が、翌週には矢崎が新宿署にやってきた。

朝の会議で、阿坂が課員に告げた。

「うちに以前いた矢崎さんが、北新宿の事件の事後処理に関連して、短期間ですが鮫島さんのサポートにあたることになりました。現在の所属は、本庁警備部の災害対策課ですが、処理が終わるまで、生活安全課に通ってもらいます。出向というわけではなく、処理が終わるまでです」

「よろしく願います」

「悪いのと組まされたな。テキストがない人だからな」

古参の平野ひらのという課員がいった。

「どういう意味です?」

阿坂あさかが聞き答めた。

「鮫島警部はとことんやられる、という意味です。手抜きが一切ない。刑事の鑑かたみってことですよ」

薄笑いを浮かべ、平野は答えた。生活安全課には八年前もいて、捜査情報の漏洩ろうえいを疑った当時の桃井課長が外にだした。が、桃井が亡くなり、定年が近いということで本人が希望して新宿署に戻ってきた。暴力団とずぶずぶの関係になるのをためらわない、古いタイプの刑事だ。

「手抜きをしないのは当然です。そんなことで刑事の鑑かたみになれるなら、ここにいる皆さんはすべて鑑かたみになって下さい」

平野は口もとを歪ゆがめた。年齢が近いのに、女性の阿坂が警視、平野が巡査部長という階級の差があつて、平野は阿坂を嫌っている。阿坂が着任するまで、最も嫌われていたのが鮫島だった。

「何なら平野さんも鮫島さんと組みますか。変則的ですが、三人チームでもかまいません」

阿坂は表情をかえず、いった。

「いや、それは無理です。抱えている事案で手いっぱいなんです——」

平野が手をふるると、失笑が洩もれた。鮫島は平野を見つめた。

「勘弁してくれよ」

平野が小声でいった。

希望して新宿に戻ってきた平野だが、かつて「仲良し」だった暴力団員の大半が収容されたり、しやばにいても飲み歩いたりできない状況にある。その点では、悪さをしたくてもできない。

会議が終わると、阿坂、矢崎、鮫島の三人で別室に入った。鮫島は訊ねた。

「高川と連絡をとったか？」

「とりました。公安部じゃ扱えない事案なので、新宿の生安に預けたいといったら不満そうでした」

「なぜ所轄なんだ、せめて本庁生安か組対じゃないのか、と？」

鮫島がいうと、

「まったくその通りのことをいいました」

矢崎は頷いた。

「それで何と答えました？」

阿坂が訊ねた。矢崎は目を伏せた。

「とりあえず新宿署で扱って、場合によっては本庁に上げる、と」

「模範回答ね。それでいい。高川は今、どうしているの？」

「東葛西ひがしにある、自分の会社『フジ緑化』におとなしく出勤しています。『フジ緑化』は支社が栃木県かの鹿沼かにもあって、そこといたりきたりのようすが」

「鹿沼は土がいのよね」

阿坂はいつて微笑んだ。

「ガーデニングの趣味が？」

鮫島は訊ねた。

「そんなたいそうなものじゃないけれど、本当に小さな庭が家にはある。主人とときどき植木の苗木を買いに鹿沼に行く」

「庭の植木ですか」

矢崎がまぶしそうに阿坂を見た。

「話をそらしてごめんなさい。それで高川とはいつ会うの？」

「基本、いつでも会えるようですが、会社と自宅で会うのは勘弁してくれと」

矢崎は答えた。鮫島はいった。

「自宅は目黒の青葉台だったな」

「ええ。タワーマンションです。いわゆる億ションで奴です」

「本業で買えるかしら」

阿坂がいった。

「金石の裏ビジネスで得た金も注ぎこんでいるでしょう。マンションを売り買いすればマネーロンダリングにもなる」

鮫島はいった。

「極道とのがいはそこね。暴力団員はそもそも不動産の契約ができない」

「どこで会う？」

鮫島は矢崎を見た。

「場所は自分に決めさせてほしいといわれました」

「じゃあ、連絡をとってみてくれ」

「今日でもかまいませんか」

矢崎の問いに鮫島は頷いた。矢崎は携帯電話をとりだした。操作し、告げた。

「矢崎です。今日、会うことは可能ですか。ええ。いえ、ひとりではありません。新宿署の方もいっしょです。そうです、ええ、鮫島さんです」

間が空いた。同行が鮫島だと聞いて渋っ渋っしているようだ。

「それはできません。鮫島さん以外の人はいません。鮫島さんと私に会って話をするか、それとも話をしないかのどちらかになります」

きっぱりといった。矢崎は鮫島を見た。鮫島は頷いてみせた。

「わかりました。で、何時くらいでしょうか」

高川の返事を聞き、

「四時。午後四時ですね。場所はどこにしますか？」

矢崎は訊ねた。

「錦糸町。錦糸町のどのあたりでしょうか」

わかりました、と矢崎はつづけた。

「では今日の午後四時に、錦糸町の駅の周辺にいて、高川さんからの電話を待つことにします」
電話を切った。鮫島と阿坂を見比べ、いった。

「四時に、錦糸町の駅の近くにいてくれ、と。安全を確かめられたら、どこにいるか教えるというのです」

「錦糸町。東葛西からはまあまあ近いわね。高川は車で動いているの？」

阿坂の問いに矢崎は答えた。

「通勤に使っています。レクサスの大型SUVです。あとは社用車のバンも会社にあります」

「^{わな}賢ということは考えられない？ 金石は鮫島さんを警戒している」

阿坂がいった。

「情報を渡すといつて警察官に危害を加えれば、金石そのものが厳しい捜査と取締の対象になります」
鮫島は首をふった。

「用心して下さい。拳銃はもっていくように」

いって、阿坂は矢崎を見た。

「あなたは？」

「いえ、もっていません」

とまどったように矢崎はいった。

「予備の銃を保管庫からだすように手配します。もしなかったら、わたしのを貸します」

阿坂はきっぱりといった。

6

三時過ぎに鮫島と矢崎は錦糸町に到着した。場合によっては錦糸町からさらに移動することもありうる。覆面パトカーは使わず、徒歩だ。

駅ビルの近くで二人は待った。平日の午後だが人通りは多い。買物客だけではなく、営業などで動いている勤め人もかなりいるようだ。

「なつかしいな。学生時代、よくきたんです。アパートが木場のほうだったので」

矢崎がいった。

「確かに木場からは近いな」

鮫島は答えた。

「けっこう怪しい感じの店も多くて、どきどきしました。自分は経験がありませんが、ボツタクリにあつたという話も聞きました」

「本人は隠しているつもりでも、地方からでてきたばかりの学生はすぐに見抜かれ、カモにされる。新宿も同じだ」

「友だちがいないからです。ひとりで部屋にいてもつまらないから、ついふらふらと盛り場にてくる。そういう奴を待ちかまえている、キャッチの女がいる。自分と同じ年くらいの娘がやくざとつながつているなんて、田舎からでてきたばかりの十八、九の小僧は考えもしませんからね。十八、九のチンピラなら理解できても、まさか女の子が、と思う」

矢崎はつぶやいた。

「女の方がタチが悪い場合もある。二十はたちといつて、組の若い奴を用心棒がわりに使っていたキャッチバーのホステスが、つかまえてみたら十六だつたことがある。十六で、組の盃をもらっているのを二人、顎で使っていた」

鮫島はいった。矢崎は息を吐いた。

「環境ですかね」

「新宿生まれの新宿育ちで、母親も覚醒剤と売春の逮捕歴があつた。だが同じような生まれでも看護師になって、のちに区議会議員になつた人も知っている」

矢崎の携帯電話が鳴つた。

「はい、矢崎です」

矢崎は耳にあてた。

「そうです。駅ビルの前にいます」

答えてあたりを見回した。どうやら高川はどこからか二人の姿を確認したようだ。

「わかりました」

答え、電話を切った。

「JRの線路沿いに亀戸かめいどのほうに歩け、と。川につきあたるから橋を渡って左に曲がれといわれました」

「いこう」

錦糸公園前の道を二人は東に向かって歩いた。四百メートル足らずで横十間川よこじゆけんがわにつきあたった。

かかっている小さな橋には錦糸橋にしんしよばしという名がついている。渡ると錦糸から亀戸に地番表示がかわった。「フジ緑化」と車体に書かれたワンボックスカーが止まっていた。運転席に男がひとり乗っている。

鮫島はあたりを見回した。ショッピングカートを押す老女がひとり歩いているだけだ。他に止まっている車はない。

運転席のドアが開き、大柄な男が降り立った。背は百八十センチくらいで、腹回りにも肉がついている。よく日に焼け、淡いグリーングリーンの作業衣を着けていた。

「高川です」

小声で矢崎がいった。

「うしろに乗ってくれ」

高川はワンボックスの後部席を示した。

二人はスライドドアを開け、後部席に乗りこんだ。汚れてはいないが土の匂いがした。二人が乗るのを確認し、高川はワンボックスを発進させた。

「どこへいくんです？」

矢崎が訊ねた。

「とりあえずその辺をひと回りして、安全を確認したら、オリナスの駐車場に止める」

「オリナス？」

「シヨッピングモールだ。そこで話そう」

矢崎は鮫島を見た。鮫島は頷いた。

「わかりました」

高川の運転は巧みだった。不必要なスピードはださないが、とろとろとは走らない。十分ほどバックミラーを確認しながらあたりを走り、やがて錦糸公園の北側にある商業施設の地下駐車場に入った。最初の一時間は無料という表示がでていて、地下一階二階だけでも数百台は止められる。

周囲の駐車車が少ない一画に高川はワンボックスを止めた。エンジンを切り、うしろをふりかえった。

「あんたが鮫島さんか」

「誰かから私の話を聞きましたか」

高川が頷き、

「今、うしろに行く」

と行って運転席のドアを開いた。後部席に移ってくると、空いているシートにかけた。

「倉木から聞いた。残留三世を目的の敵にしてるってな」

鋭い目で鮫島を見つめた。鮫島は首をふった。

「残留孤児三世を目の敵にしているわけではありません。覚醒剤の密輸を捜査していたところ、海外と日本の暴力団の仲立ちをしている残留孤児二世三世のグループにつきあたった。そのグループは覚醒剤密輸以外の罪も犯している」

高川は目をそらした。

「どこから金石という名を聞いた？」

「初めて聞いたのは、当時の組織犯罪対策課の人間からでした。実体がなかなかつかめず、苦慮しているということだった。そこで私は引退した元組長から話を聞こうと千葉まで会いにいった。次に会いにいったとき、その元組長は、奥さんと飼っている犬もろとも殴り殺され埋められていた」

鮫島は途中で口調をかえた。高川は無言だった。

「姫川といって、解散した須動会という組の元組長だった」

「知らないね」

「須動会には松沢まつざわという組員がいた。解散後、栄勇会えいゆうかいに移り若頭補佐にまで出世した。外様とさまなのに異例のスピード出世だ。理由は覚醒剤だ。栄勇会になかった覚醒剤のルートを開拓し、大きな儲けをもたらした」

「やくざの話なんかされてもな。こっちはカタギなんだ。ちんぶんかんぶんだよ」

高川は矢崎を見やり、わざとらしく苦笑した。

「もう少しだ。松沢は栄勇会に移ったあと、女房の籍に入り、吉田よしだと改名した。その女房が残留孤児二世で、中国との覚醒剤密輸のパイプをつないだ」

高川の表情が動いた。

「心当たりがあるんだな」

高川は答えず、矢崎にいった。

「俺は警察に協力するっていつてるんだ。なのに最初から人を犯罪者扱いする奴を連れてくるなんておかしくないか」

「あなたが犯罪者でなかったら、情報提供はできない。それが前提で、話をしたいといってきたのでしよう」

矢崎が答えた。

「それはそうだが、情報を提供したら、俺を逮捕しようとするかもしれないじゃないか。そんな奴に話なんかできない」

高川は鮫島をにらんだ。

「司法取引について誤解があるようだな」

鮫島は静かにいった。

「何だよ、誤解って」

「まず司法取引に関してだが、警察官に決定権はない。警察官にできるのは検察官への情報提供だけだ。さらに、司法取引のためであっても犯罪への関与が疑われれば、逮捕は免れられない。逮捕した上で、司法取引に応じるかどうかの決定は検察官がおこなう」

高川の顔が白っぽくなった。

「そうなのかよ。映画とかじゃ——」

「映画と現実がちがいます」

矢崎がいった。

「じゃあ、俺は守ってもらえないのか」

「自分の身を危険だと思ふ理由があるのですか」

「金石の話をする事自体が危ないんだ」

「じゃあ、なぜする？」

鮫島は高川の目を見つめた。

「なぜって、それは——」

高川は口ごもった。矢崎にいう。

「話してないのかよ」

「何者かが金石を牛耳^{ぎゅうじ}ろうとしているという話か？」

鮫島はいった。

「そうだよ」

「そんな人間がいるとして、なぜ恐れる？ 金石には何百人というメンバーがいるのだから。ひとりが

いいだしたところで簡単にはかわらない。それともそいつは逆らう奴は皆殺しにするとでもいうのか」

「そうだよ。そいつにはとんでもない奴がついている。さっきの姫川つてのを殺したのもそいつだ」

「その犯人を知ってるのか」

高川は首をふった。

「知らねえよ！ 名前も顔も」

「だったらなぜ犯人だとわかる」

「あんた、殴り殺されていたといったろう。頭じゃないか、殴られていたのは」

「そうだとしたら？」

「そういう奴がいるんだ。伝説なんだ。頭を叩き潰す。そいつにかかったら一撃で頭蓋骨を砕かれる」

「他にもそういう被害者を知っているのか」

「聞いたことがあるだけだ」

「まさに伝説だな」

「ああ。ヘイシだ」

「ヘイシ？」

「黒い石と書く。中国読みでヘイシ」

高川はいった。

「その黒石が金石を牛耳ろうとしているのか？」

「ちがう！ 黒石はそいつの兵隊だ」

「じゃあ牛耳ろうとしている人間は何というんだ？」

高川は首をふった。

「名前や顔はわからない。ネットじゃ徐福じょふくと名乗っている」

「徐福？ 不老不死の薬を探して日本にきたともいわれている仙人のか？」

鮫島の言葉に頷いた。

「ネットについて話して下さい」

矢崎がいった。

「金石のメンバーがネット上で交流しているということですね」

「八石だけの掲示板があるんだ」

高川は頷いた。

「八石についてももう一度」

「金石の中でも、特に顔が広かったりコネをもっている八人のことだ。ネットワークのハブ的存在で、SNSなんかで他のメンバーに情報を流す役割だ。だから別にポストかそういうのじゃない。八石のいうことだから聞かなきゃいけないとかいう決まりはないんだ。もともと上下とかのないグループだからな」

「掲示板の話を」

矢崎がうながした。

「八人だけの匿名掲示板で、作ったのがその徐福だ。海外のサーバーを使って設定し、アクセスするのも別の国のサーバーを経由する。だからひとりひとりの正体をたどるのは警察でも無理だ。掲示板の名前が『八石』なんだ。そこでいろんな情報を交換する。ビジネスの話や——」

高川は鮫島を見た。

「新宿署の鮫島という奴がうるさく嗅ぎ回っている、なんて話もな」

「八人になった理由は何だ？」

鮫島は訊ねた。

「自然にだ。メンバーがメンバー全員を知っているわけじゃない。横のつながりで広がっていった人になった。あくまで横のつながりだから、会ったこともない人間もいる」

高川は答えた。

「名前も知らないのか」

「知らない。ネット上じゃ皆ハンドルネームだ。『徐福』みたいに仙人の名前を使うのもいるし——」

高川は口ごもった。

「あなたのハンドルネームは？」

「『虎』」

「他のハンドルネームを教えてください」

高川は小さく唸り、目を閉じた。

「徐福」「雲師」「安期先生」「鉄」「扇子」――

止まった。思いだしているようだ。

「あと二人、いる」

鮫島はいった。

「ああ。『左慈』に『公園』だ」

「どんな字を書くのかを教えてください」

ノートを広げた矢崎がいった。高川は教え、

「雲師」「安期先生」「左慈」は仙人の名前だ。最初に「徐福」が使ったんで、真似をしたんだ」

「あんたはなぜ『虎』に？」

鮫島は訊ねた。

「仙人のことなんてよく知らないし、タイガー・ウッズが好きだから虎にした」

「鉄」や「扇子」も仙人のことを知らないからそういう名にしたのですか」

矢崎が訊ねた。

「他の人間の理由はわからない。でも『鉄』は、まあそうだろうな」

「知り合いなのか」

鮫島が訊くと頷いた。

「鉄」と「雲師」「安期先生」は知っている」

「本名を教えてください」

「そんなことできるわけないだろう。警察に売ると同じだ」

高川はいつて矢崎をにらんだ。

「黒石」から守ってほしいのじゃないのか」

鮫島はいつた。

「黒石」を使っているのは「徐福」だ。他の連中は関係ない」

「じゃあ「徐福」と「黒石」の本名と住所を教えろ」

「知らないっていつたろう。名前も顔も」

高川は声を荒らげた。鮫島は矢崎を見た。ここは矢崎に任せる。

「高川さん、名前も顔も知らないでは、我々にはどうすることもできません。「鉄」と「雲師」「安期先生」から「徐福」や「黒石」に関する情報を得られますか」

「俺がか？」

「あんたが訊かなけりや、訊くのは我々ということになる」

鮫島はいつた。高川は首をふった。

「お互い詮索しないのが決まりなんだ。訊けるわけない」

矢崎は高川を見つめた。

「では我々は何をすればいいのですか。あなたが教えてくれたのは、金石に八石と呼ばれる中心的メンバーがいて、その八人はネット上で情報交換をしている。八人のうちのひとり、ハンドルネーム「徐福」が金石全体を牛耳ろうと考えていて、逆らう者には「黒石」という人間をさし向ける、というだけです。あなた以外の七人は名前も住所もわからない。それで我々にどうしろと？」

高川は目を伏せた。

「わかってる。わかってるよ。だけど、俺もどうしていいかわからないんだ」
低い声でいった。

「あんたが『黒石』を恐れる理由は何だ？」

鮫島は訊ねた。高川は顔を上げた。

「え？」

「徐福」のいう通りにするなら、『黒石』に襲われる心配はないのだろう？」

「いう通りになんかできるわけないからさ」

「何か具体的な要求をされたのか？」

「いや、まだ何も」

「された人間はいるのか」

「『鉄』がされたといってた」

「どういう要求をされたんだ？」

「いえない。それをいったら『鉄』を密告もくこくのと同じだ」

高川は首をふった。

「あんたは『鉄』を知ってるといったな。『鉄』はその要求にしたがうのか」

「したがるわけない。『徐福』は『鉄』の、その、事業を渡せといっているらしい」

鮫島と矢崎は目を見交みかわした。

「高川さんも同じことを要求されると考えている。そして断われれば『黒石』に襲われると？」

矢崎が訊いた。高川はあきらめたように頷いた。

「そういうことだ」

「要求される事業というのは、あなたの本業か？　ちがうな。裏の商売だろう」
鮫島はいった。高川は黙った。

「『徐福』は、八石全員に事業を渡せとっているのですか？」
矢崎が訊ねた。

「いや。八石の中には、ふつうのサラリーマンもいる。そんな奴とはこれまで通り、情報交換をするだけだろう」

「つまり『徐福』は、あなたとはちがって八石全員の名前や仕事といった情報をつかんでいるのか」
鮫島の問いに高川は頷いた。

「たぶんな」

「どういう人間なんだ？　噂とかも聞いていないのか」

高川は掌てのひらで顔をこすった。

「俺はオタクだと思ってた」

「オタク？」

「引きこもりみたいな奴さ。もちろん本当の引きこもりじゃないだろうけど、日がな一日パソコンと向かい合っているような。ネットからいろんな情報をひっぱって、それを投資に役立ててみたいということを書いてた」

「個人投資家ですか」

矢崎がいった。

「何十億って銭を動かしてるって話だった」

「そんなに金をもっているのなら金石を牛耳ろうとする理由は何だ？」

「そんなこと俺にわかるわけないだろう。もっと金が欲しいのかもしれないし、実験をしたいだけかもしれないし」

「実験？」

「徐福」つて奴は、自分はすぐく頭がいいと思ってる。書きこみのはしほしにそれが見える。実際賢くて、他のメンバーがぶつかってる壁とかの悩みにすばつと答えて、感謝されたりしてる。昔から、金石のネットワークをもつと有効に活用すべきだつてのが「徐福」の持論だつた」

「それに反対したメンバーはいないのですか」

矢崎が訊いた。

「いたよ。「左慈」は、今のままでいいとずっといつてた。会つたことはないんだが、たぶんふつうの勤め人なんだろう。勤め人といつても、専門職つていうか、企業の研究所にいるみたいな。そんなことを前書いてた」

「完全なカタギということですか」

「ああ。学歴もあつて大企業で働いてるつて感じの奴だ。所帯もあつて、自分は残留三世だけど、それで特に嫌な思いをしたことはない。でも残留孤児というルートは大事にしたいから金石に参加している。カタギになりたいがやりかたがわからないという人は相談してくれ、と」

「まっとうな人ですな」

「そういうのも金石にはけつこういいる。もし「徐福」が牛耳るようになったら、やめていくだろう。「左慈」にしてみりや、危ない手段で得た金なんて欲しくないだろうし」

「徐福」はどうする？ カタギのメンバーがやめていくのは関係ないと考えるか、それともイチ抜だけは許さないと考えるか」

鮫島は訊ねた。

「わからない。けど『左慈』はけっこう理屈っぽい奴だから、この前も『徐福』とやり合ってた。横並びのネットワークのほうがより広く情報を集め共有できるので、なんで古臭いピラミッド型にする必要があるんだ、と」

「『徐福』は何と答えたのですか」

「ネットワークのいい部分を残しながら、ひとつの目的に集中できる組織に再編するんだ、と。そうだ、それに『左慈』が、ただ実験したいだけじゃないのかと返していたんで、実験という言葉覚えていたんだ」

高川はいった。矢崎は鮫島をちらりと見やり、いった。

「掲示板でのやりとりを我々に見せてもらえませんか」

「家族にも見せないという決まりだ」

鮫島は高川の目を見ていった。

「これまでの話は、全部あんたが知っているだけだ。作り話じゃないという証拠は何もない」

「ふざけるな！俺がわざわざ警察に作り話をするわけないだろう」

「と、私も思います。ですが、鮫島さんのいうように高川さんの話には裏付けがありません。だいたい金石というグループについて知っている人間がそもそも少ないのですから」

矢崎がいうと、高川は黙った。

「あんたは、『鉄』というメンバーが『徐福』からとても応じられない要求をされたと知って、自分にも同じような要求がくるかもしれないと考えた。それはあんたに大きな儲けをもたらしている非法の商売を渡せという話なのだろう？そこで何とか防ごうと警察を巻きこむことを思いついた。だ

が警察は警備会社じゃない。何も教えないでただ守ってくれといわれてもそうはいかない」

鮫島はいった。高川は鮫島を無視し矢崎をにらんだ。

「俺は協力するといったんだ。なのにこいつのいいぐさは何だ。容疑者扱いじゃないか」

矢崎が口を開きかけた。鮫島はそれを目顔で制した。

「矢崎くんはあなたに怪我をさせられたにもかかわらず、親切心で動いている。だが俺にとってあなたはただの容疑者だ」

「俺が何をしたっていうんだ。この野郎！ 田町の件につきちや裁判も終わってるんだぞ」

「陸永昌と組み、覚醒剤の密輸にかかわっている。あなたを通じて入ってきた覚醒剤は榮勇会に流れ、それをシノギにした吉田はスピード出世をした。吉田はシノギについては喋らないまま服役中だが、金石に対し決していい感情をもっているわけじゃない」

鮫島は高川から目をそらさず告げた。

「ふざけるな。何だよ、これは。話を聞くフリをして俺をパクる気か」

「パクられてもいいから保護してもらいたいというのが本音じゃないのか」

高川は目をみひらいた。

「降りろ！ 話は終わりだ」

「高川さん——」

「うるせえ！ この野郎と話なんかしたくない。二度と連絡をしてくるんじゃないぞ」

高川は矢崎に怒鳴った。

「吠えなければ吠える。ケツに火がつくのはあなたであって、我々じゃない」

鮫島は冷ややかにいい、座席から立ち上がった。矢崎は迷ったように鮫島と高川を見比べていたが、

立った。

高川は運転席に移りワンボックスカーのエンジンを始動させた。二人がスライドドアから降りるのを待って、荒っぽく発進させる。

「よかつたのでしょうか」

駐車場をでていくワンボックスカーを見送りながら矢崎がいった。

「思い通りにはならないと気づかせない限り、自分にとって都合のいい話しかししない」

「しかし情報が入らなくなつては意味がありません」

鮫島は矢崎を見た。

「筋がよくても悪くても情報が入れれば収穫と考える公安とちがつて、刑事は立件できなければ、意味がない」

「じゃあ今日のこれは駆け引きですか」

矢崎はあきれたように訊ねた。

「駆け引きになるかどうかは向こうしだいだ。場合によってはこれきりだ。だがしゃぶを売った金で億シヨンに住んでいるような奴に警察が親切にしてやる必要はないと俺は思う」

鮫島は答えた。

7

ヒーローに出動の要請が届いた。『指令書』によれば、ターゲットは大企業の社員を装いながら、この世界を悪に染める思想を拡散している人物だという。

確かに駅や路上での勧誘と比べて、有名な会社に勤務している人間の言葉に人は耳を傾ける。大会社で働いているなら、教養も常識もある、と思うからだ。

だがこの世界は、見た目通りでは決していない。悪の思想を隠しもち、機会があればそれを広めようという奴が多く隠れている。それは何の変哲もない石の下に毒虫が潜んでいるのと同じだ。

石をどけようとしないう限り、毒虫の存在に人は気づかない。あるいは、いるかもしれないと思っただけでも、わざわざ確かめない。

ヒーローと一般人のちがいはそこだ。

ヒーローは毒虫を見逃さない。毒虫が隠れていけば、暴き、息の根を止める。悪の拡散を防ぐ。

ひとつひとつは、とても地味な仕事だ。毒虫一匹を殺したところで、世界は簡単にはよくならない。テレビや映画とはちがう。ヒーローとは決して華々しい存在ではないのだ。人知れず静かに、毒虫を一匹、また一匹と潰していく。

毒をもつ生きものがすべてそうであるように、毒虫は危険に敏感だ。ヒーローが出動していることに気づけば、あっという間に姿を消す。別の石や仲間の陰に隠れる。

だから騒がれては駄目だ。こっそり近づき、一撃で叩き潰す。

ターゲットの情報が届いたら、最低限の確認はするが、不用意にその周囲をうろついたりほししない。映画にでてくる殺し屋は、事前にターゲットの情報を収集する。生活習慣、よくいくレストラン、散歩のコース、愛人の住居、ボディガードの有無、調べつくしたあと、タイミングを見はからって決行する。

作りもののお話だ。今の時代、ターゲットの周辺をうろつけば、そこらじゅうにある防犯カメラに監視する自分の姿を残すことになる。

警察がターゲットの行動範囲にあるカメラを調べ、あつという間に「被害者の近くにいた不審な人物」を見つけたすだろう。たとえ決行の瞬間を撮影されなくても結果は同じだ。

真のヒーローはそんな愚かな真似はしない。ターゲットに近づくのは一度きり、人目がない場所が理想だが、ひとりふたりが近くにいても、こちらを見ていなければ問題は無い。

大きな音をたてず、素早く一撃で止めれば、意外に人は気づかない。イヤフォンで音楽などを聞いていれば尚さらだ。

何より大切なのは、近くに防犯カメラがない場所を選ぶことだ。決行の場に向かう自分の姿を撮られてもならない。どうしても避けられないなら、マスクと眼鏡、帽子で顔を隠す。さらに、彼だけの得意技を用いる。

それは、猫背だ。重いものを扱う日常のせいもあるが、子供の頃から上半身が発達していたので胴長短足をかからかわれたくなくて背中を丸めていた。

出動するとき、猫背をやめる。背筋をまっすぐ伸ばすだけで、身長が五センチは高くなる。ずっと背筋を伸ばしているのはつらいので、衣服の下にコルセットを着ける。コルセットをしていけば、気を抜いた瞬間に猫背に戻ることもない。

たったそれだけで人の印象や万一撮られたときの防犯カメラの映像が、別人になる。

さらに背を高く見せるための靴もはく。コルセットと靴で、彼の身長はふだんより十センチ以上伸びるといふ寸法だ。

一石二鳥につづいて、今度は寸法ときた。まったくどうしてこう、ぴったりのいい回しばかり思いつくのだろう。

出勤は、もちろん成功した。

8

高川と会って四日後の朝、本庁勤務に戻っていた矢崎から鮫島のパソコンにメールが届いた。

千葉県袖ヶ浦市で石油化学プラント社員の四十歳の男性が死亡したという、新聞の地方版記事のコピーだった。

男性は勤務先から自宅に帰る途中の道路に止めた車のかたわらで発見された。車は男性のもので、頭を強く打ったことが死因になったと考えられ、警察が事件、事故の両面から捜査をおこなっているという内容だ。

別の地方紙の記事によれば、死亡した男性は、勤務先の石油プラントの研究員だったとある。

「気になりませんか」

というコメントが添えられていた。鮫島は矢崎に連絡をとり、その日のうちに現場を管轄する木更津警察署に覆面パトカーで向かった。

木更津警察署はアクアラインを渡ってすぐのインターチェンジから一般道を南下した位置にある。署から事前に電話を入れ、担当者に話を聞きたいと頼んでいた。

木更津署に到着すると、交通課課長と担当の巡査部長が待つ会議室に案内された。名刺を交換する。交通課課長は近藤（こんどう）という警部で、担当者は小山（こやま）といった。二人とも五十になるかどうかという年齢だ。

「新宿からわざわざこられるとは、被害者は何かしておったんですか」
太って顎のたるんだ近藤が訊ねた。

「いえ。被疑者というわけではありません。昨年逮捕した傷害事件の犯人と交友関係にあった可能性があり、この犯人が覚醒剤の密輸にもかかわっていることから、何かそういう情報がでないか、うかがいに参ったのです」

鮫島が答えると二人の表情が真剣になった。

「覚醒剤ですか。しかし遺体にはそういった痕跡はありませんでしたが――」

いしかけた小山を近藤が制し、訊ねた。

「お二人は、この被害者が覚醒剤に関係しているとお考えなのですか」

「それを確かめるためにきました。被害者の情報をいただけるとありがたいのですが」

「こちらの捜査では、被害者が犯罪に関係していると思われるようなことは何も見つかっていません」
「コピーはお渡しできませんが、ここで読まれるぶんにはかまいません」

「ありがとうございます」

鮫島はいつてフアイルを広げた。

被害者の名は大木陽おおきひろしといった。東京に本社がある大手石油化学プラントの社員で、大阪の研究所から袖ヶ浦市にある工場に向中だった。単身赴任で、妻と二人の子供は大阪の自宅にいる。死亡時の住居は、会社が借りた袖ヶ浦市内のマンションだ。

遺体が発見されたのは湾岸部を走る国道と内陸よりの県道をつなぐ生活道路で、近くの水田を囲む側溝にうつぶせで倒れていた。かたわらに止まった自家用車はハザードを点ともしており、右側前輪がパンクしていた。

「被害者はタイヤの異常に気づいて車を止め、のぞきこんでいたところを対向車にはねられたと思わ

れます。はねた車はそのまま逃走したもようです」

近藤がいった。

「ひき逃げの発生時刻は、被害者が勤務先での残業を終えた午後九時以降、十一時までのどこかだと思われます。現場となった道路は、被害者の自宅マンションに向かう裏道で、道幅が狭く街灯もないのですが、信号がないので走行時間が短縮できます。被害者が日常的にこの道を走行していたことは確認済みです」

小山があとをうけて説明した。矢崎が訊ねた。

「十一時というのは、被害者が発見された時刻ですか」

「そうです。犬の散歩をさせていた付近の受験生が見つけました。遺体が側溝にすっぽりはまりこんでいたため、それまで現場を通行した車は気づかなかったようです。現場にひき逃げ車輛しやりようからの落下部品がなかったことも、発見が遅れた理由だと思われます」

鮫島は小山を見つめた。

「落下部品がない？」

「ええ。まれにですが、そういうことが起こります。衝突時、被害者が姿勢を低くしていた場合、ライトやウインカーといった破損しやすい部品ではなくバンパー下部に当たり、破損した部品が落ちないのです。乗用車ではなく大型トラックなどで発生します」

「ブレーキ痕はなく、おそらく運転手は衝撃に違和感を覚えたものの、そのまま走りさったと思われます。それも大型トラックだと考えられる理由です」

近藤がつけ加えた。

鮫島はファイルに添付された写真を見た。

現場の道路は、人家もまばらで、刈り入れが間近だと思われる水田の中を通っている。

側溝の深さは五十センチほどあり、そこに人が倒れていても、夜間、走行中の車からは確かに見えにくそうだ。

司法解剖の結果、死因は脳挫傷。頭蓋骨が頂点部から陥没しており、滑なめらかに硬いものが強くぶつかったと思われる、という所見だった。

「事件性も考慮し、被害者の自宅マンションも調べましたが、犯罪との関連をうかがわせるものは何も見つかりませんでした。勤務先での評判もよく、単身赴任にもかかわらず、飲み歩いたりという行動もなかったようです」

近藤がいった。

「パソコンはどうでした？」

矢崎が訊ねた。

「パソコンですか？ 被害者の車の助手席におかれたバッグに入っていました」

小山が答えた。

「それは？」

「つとめているプラントからの貸与品ということで、返却しました」

「個人所有のものはなかったのですか？」

「自宅マンションにありました。大阪からこられたご遺族がもち帰りました」

鮫島と矢崎は顔を見合わせた。ファイルの中に被害者大木陽の社員証のコピーがあった。

額が秀で、眼鏡の奥の目をみひらいているように見える顔写真を鮫島は見つめた。許可を得て、大阪市内の自宅の住所と電話番号をメモする。

「被害者がひき逃げにあったとして、覚醒剤の事案に関係しているとお考えですか？」
近藤が鮫島に訊ねた。

「いえ。お話をうかがっていると、そうは思えません」

「でしような。被害者が勤務していたのは一流企業で、そんなところの社員が覚醒剤にかかり、ましてそれが理由で殺されるとは考えられない」

近藤はいった。

「ひき逃げの捜査状況はどうなっているのでしょうか？」

矢崎が訊ねると、とたんに渋い表情になった。

「現場の道路には防犯カメラの設置がなく、周辺地域のカメラに写った大型トラックなどを調べているのですが、今のところ該当するような車輛は見つかっていません」

矢崎は頷き、近藤と小山の顔を見比べた。

「あの、ひき逃げ以外の死因というのは考えられませんか」

近藤が眉をひそめた。

「他の死因というと——？」

「たとえば撲殺されたとか」

近藤と小山は顔を見合わせた。

「誰が殺すのです？ 被害者に金品を奪われた形跡はなく、トラブルを抱えていたという情報もありません。よしんばそうであっても、殺害が目的なら、刺すなり撃つなり、もっと簡単なやり方をしたと思います。それとも殺害されたと疑うに足る理由を、何かご存じなのですか」

近藤が訊ねたので、鮫島は首をふった。

「いえ。そういうものはありません。あくまでも疑いがないか、というだけで」

「ない、といえますね。うちの管内は、新宿とはちがいます。筋者すぢもんもいるにはいるが、風俗のケツモチがせいぜいで、食っていくのがやっとです。もちろんしゃぶをやっている者もいるでしょうが、殺人となるといささか考えにくいですな」

「私が臨場りんじょうした印象では、非常に不幸な偶然が重なったのだと思います。パンクに気づいた被害者が車を止め、のぞきこんでいた。そこに対向車のトラックがきて、被害者がかがんでいたこともあり、頭部をバンパーが直撃した。衝撃で被害者は路肩の先にある側溝に落下する。トラックの運転手は違和感を感じたが、止まっている被害者の車と接触したようすもないのでそのまま走りさった」

小山がいった。

「よくわかりました。ありがとうございます。帰りに現場を見ていきたいと思うのですが」

鮫島が答えると、

「私のご案内します」

小山は頷いた。

木更津署をでた二人は、小山のバトカーに先導されて現場に向かった。路肩に車を止める。

ぎりぎり片側一車線あるかどうかという狭い一本道だった。かたわらの水田とのあいだに細い水路がある。街灯はなく、夜間はまっ暗だろう。

「車はここに止められていて、死体はこの下の側溝にありました」

小山が説明した。水田で蛙が鳴き、離れた国道を大型トラックが走っているのが見える。

「見通しがいいのが、むしろ仇あだになったのですな。曲がりくねった山道だったら、運転者は前方を注視しますが、狭くてもまっすぐで平坦な道では漫然とした運転になりがちで、案外事故というのは、

そういうところで起こります」

ベテランの交通警察官らしい言葉だった。

「血痕とかはどうだったのでしょうか」

かがんで地面を調べていた矢崎が訊ねた。

「ほとんどありませんでした。ゴン、とバンパーが頭にぶつかり、体のはねとばされてそれきりだったのでしょうか」

小山は首をふった。

「もしバットのような凶器で殴りつけたのなら、遺体に複数の傷が残っている筈ですが、傷は一カ所のみで、それが致命傷でした」

矢崎は鮫島を見た。鮫島は小さく頷いた。

同じ千葉の山奥で撲殺され庭に埋められていた姫川夫婦の頭部にあった傷も一カ所だった。犯人は、正確で容赦のない一撃を被害者に加えている。

「お忙しいところ、お手間をとらせ申しわけありませんでした。いろいろ、ありがとうございました」
鮫島は頭を下げた。

「いやいや。どうもお役に立ったような、立てなかったような、複雑な心境ですな」

小山は人のよさそうな顔をほころばせた。

「我々はこれで東京に戻ります。帰り道はわかりますので、ここだけっこうです」

「ありがとうございます！」

矢崎も頭を下げた。

「じゃ、これで——」

小山のパトカーがきた道を戻っていくのを二人は見送った。矢崎が訊ねた。

「どう思いますか」

「被害者が残留三世だったかどうかを遺族に確認すべきだろうな」

「それは自分がやります」

「理由はどうする？ 下手な訊き方はできないぞ。万一、奥さんも金石につながる人間だったら、

我々が動いていることが伝わる」

鮫島は矢崎を見た。

「新聞社の人間のフリをして、問い合わせがあったことにしてはどうでしょう。記事を見た人が、自分の知る残留孤児三世と同一人物かどうかを知りたくて編集部にかけてきた、と」

「さすが公総だな」

鮫島がいうと、矢崎は首をふった。

「嬉しくないです」

携帯電話をとりだし、ファイルにあった大阪の大木陽の自宅にかけた。携帯を耳にあて、しばらく待っていたが、

「留守番電話です」

と首をふった。

「じゃ、またかけなおそう」

二人は覆面パトカーに乗りこんだ。鮫島がハンドルを握り、東京に戻る道を走りだす。

「あのあと、ハンドルネームに使われている仙人についてネットで調べてみました」

矢崎がいった。鮫島も調べていたが、

「どうだった？」

と訊ねた。矢崎はノートを広げた。

「仙人が実在するとは思えないのですが、仙人になるための修行をする道士とか方士ほうしというのはいたようです。『徐福』もそのひとりで、秦しんの始皇帝しやうていの命めいで不死の薬を捜して日本にまできた、といわれていて、三重県や佐賀県、京都など日本のあちこちに渡来したという伝承が残っています。紀元前三世紀頃というから、二千二百年以上前の話ですよ。『雲師』というのは、黄帝こうていの別名で、こちらはもっと古く紀元前二五〇〇年くらいの人で『史記』に登場する皇帝です。『左慈』は、後漢時代の人で占星術と製薬に秀でていたようです。『安期先生』は、安期生といつて蓬萊山ほうらいさんに住んでいた仙人です。正直、どれも実在したとは思えません。モデルになったような道士はいたのかもしれませんが、尾緒おひれがついて伝説になったのだと思います。ちなみに全員、男性です」

「ハンドルネームが男でも、本人が男性とは限らない。その逆もある」

鮫島はいった。

「掲示板のやりとりだけじゃ男か女かはわかりませんね」

覆面パトカーはアクアラインに入った。東京湾にかかった四・四キロの橋を渡り、九・五キロのアクアトンネルに入る。

トンネルを抜けると神奈川県川崎市で、そこから首都高速を数分走るだけで、東京都大田区だった。羽田空港のかたわらを通りすぎ、都心へと鮫島は覆面パトカーを走らせた。

小山と現場で別れてから三十分とたっていない。渋滞していないときのアクアラインの利便性は驚異的だ。わずか三十分で千葉の田園地帯から東京都心のビル群に到達する。

首都高速の新宿出口から新宿警察署はすぐだ。覆面パトカーを返却し、署内に入ると矢崎が携帯電

話をとりだした。周囲に人がいない場所で操作し、耳にあてる。

大木陽の遺族に再度かけているようだ。自分を偽るので、生活安全課からかけるのを避けたのだろう。「あ、大木さんのお宅でいらっしやいますか。おとりこみ中のところを申しわけございません。私、千葉県で発行されており、千葉県民報編集部の平野ひらのと申します。はい、千葉県の新聞です」

平野と名乗るのを聞き、鮫島は首をふった。

「このたびは、たいへんなご不幸にあわれ、ご愁傷さまで。本紙でも、ご主人が亡くなられたことを記事にさせていただきました。実はそれに関してなのですが、読者の方から本紙編集部にお問い合わせがありまして、お電話をさしあげたしいです。といいますのは、問い合わせせてこられた読者が、ご主人と三十年近く前の友人だったかもしれないとおっしゃっています。あの、記事にはご主人の写真是載っていなかったのです、確認ができません。それで、その方がいわれるには、自分のお祖父じいさんは中国での残留孤児だった。自分の知る大木さんも残留孤児三世なのだが、御本人かどうかを確かめたい、と。はい、そうです……」

矢崎は滑らかに喋っている。

「はい、はい。そうですか。では、また問い合わせがありましたら、そのようにお答えします。本当に、たいへんなときに申しわけありませんでした。ご協力、感謝いたします。ありがとうございます
た」

携帯電話をおろし、矢崎は鮫島を見た。

「当たり前です。大木陽の祖母が残留孤児だったそうです。詳しくは知らないけれども聞いていたので、奥さんはちがうようです」

鮫島は息を吸いこんだ。

「課長に報告しますか」

矢崎がいった。鮫島は頷いた。

9

一時間後、鮫島と矢崎は会議室で阿坂と向かいあつた。鑑識係の藪やぶも同席している。意見が聞きたいからと、鮫島が呼んだのだ。

矢崎の現在の所属や鮫島との捜査の状況について、阿坂が藪に説明をしたあと、矢崎が、高川から得た情報と袖ヶ浦市で起こつた「ひき逃げ事故」の顛末てんまつを報告した。

「この大木陽の死亡記事を新聞の地方版から見つけたのは矢崎くんです。矢崎くんが確認したところ、大木陽の祖母は中国残留孤児でした」

鮫島はつけ加えた。阿坂は鮫島と矢崎を見比べた。

「その被害者が金石のメンバーだと考えているのですか」

「八石のひとりで、ハンドルネーム「左慈」ではないかと思われます。高川の話では、「左慈」は企業の研究所に勤める研究員だと、ネットの掲示板に書いていたそうです。「徐福」と意見が対立していて、ネットワークのほうがより広く情報を集められるのに、なぜわざわざ古臭いピラミッド型にする必要があるのか、と。「徐福」はネットワークのいい部分を残しながら、ひとつの目的に集中できる組織に再編するのだと答え、「左慈」はただ実験したいだけじゃないのかと返したそうです」

矢崎が答えた。

「ひとつの目的というのは何ですか？」

阿坂が訊ねた。

「それはわかりません。高川に掲示板でのやりとりを見せてくれといったら、家族にも見せない決まりだといって拒否されました」

阿坂は鮫島を見た。

「あなたは何だと思えますか」

「わかりません。私は、高川が作り話をしていてと疑ったフリをして挑発しました。自分にとって都合の悪い情報を隠し、保護だけを望んでいるように感じたからです」

鮫島が答えると阿坂は頷いた。

「陸永昌と『東亜通商研究会』の関係を知る高川は、警視庁公安部なら情報をエサに操れると考えたのかもしれないね」

「徐福」は「鉄」という八石のひとりに事業を渡せと要求したようなことを、高川はいつていました。それはおそらく非合法の事業で、あなたにも同じ要求があると警戒して、警察を巻きこんだのではないかという、高川は激高し一方的に話を打ち切りました」

「わざと、ね。駆け引きになっている」

「そう思います。大木陽が『左慈』で、『徐福』との意見の対立が原因で殺されたのだと知れば、高川も態度を変化させるでしょう」

「意見が対立しただけで殺す？　いうことに従わせたいなら別の方法もあるのじゃない？」

阿坂は訊ねた。鮫島はいった。

「あくまでも『左慈』が大木陽だと仮定しての話になりますが、完全なカタギである『左慈』は、『徐福』にとつてとりこんでも利益をもたらさない存在です。高川のように非合法のビジネスで稼い

でいる人間を殺したのでは、将来の利益を失う。一方、「左慈」は理屈っぽく、「徐福」と意見が対立していた上に、カタギになりたいという金石のメンバーをサポートしていたようです」

「むしろ「徐福」にとつては邪魔者だった？」

鮫島は頷いた。

「まだはっきりとはわかりませんが、「徐福」の目的は、金石を犯罪組織として一元化することだと思われます。そうなると金の卵を産む鳥である高川や「鉄」などを殺すより、いなくなってもかまわないカタギの「左慈」を殺して、恐怖による支配力を強めようとしたのではないのでしょうか」

「なぜ「徐福」は金石を一元化しようと考えたのかしら」

「それもわかりません。高川の話では「徐福」は個人投資家で、家にいながらにして何十億という金を動かしているそうです。ただし名前や顔は知らない、と」

「「徐福」を知らないという高川の話は信用できる？」

阿坂は矢崎を見た。

「信用できると思います。高川は鮫島さんがいわれたように、警察を利用してしようと考えています。」

「徐福」に関する情報をもっていれば、提供し、なんとかしてくれといったきた筈です。それは「黒石」に関しても同様です」

矢崎は答えた。

「ようやく藪さんの出番ね」

阿坂はいつて藪を見た。

「袖ヶ浦の件、あなたはどう思います？」

藪はとまどったように首をふった。

「俺の専門は銃器です。交通事故や鈍器を使った撲殺となると、責任はもてません」

「でもあなたは鑑識のプロでしょう。元組長の姫川夫妻の死体検案書は見た筈」

阿坂がいったので、

「そうなのか？」

鮫島は驚いて藪を見た。

「ああ。課長が千葉県警に手配してくれたんで、見た。確かに硬く滑らかな凶器で頭部を殴られ殺されている。形状は球形で、まず考えられる凶器としては鉄亜鈴だ。重さも硬さも十分といえる」

「鉄亜鈴。現場では見つかってないぞ。そんなものをわざわざもって行って、撲殺したというのか」

「刃物や銃とちがって、もっていても違法にはなりません」

矢崎がいった。鮫島は藪と矢崎を見比べた。

「確かにそうだが……」

「鉄亜鈴だとすれば、それはもう趣味だ。プロとはいえない」

藪はいった。阿坂が訊ねた。

「趣味とはどういう意味ですか？」

「おぞましい話ですが、人を殴り殺すのが趣味だということです。もしプロの殺し屋なら、もっと簡単に自分に危険が及ばない方法を使います。包丁なら刺したあと捨ててもいいし、銃であれば離れた位置から相手を殺せる。刃物でも銃でもなく、鉄亜鈴、あるいはそれに近いものを凶器に用いているとすれば、本人が好んでいるとしか考えられません。袖ヶ浦の事案も、交通事故に見せかけたというより結果として事故だととられてしまった」

「でも、なぜ裏道で殴り殺すのですか。もっと待ち伏せしやすいマンションとか——」

いいかけ、矢崎は目をみひらいた。

「防犯カメラか——」

藪は頷いた。

「そこがこの犯人の狡猾なところだ。襲撃しやすいマル害の自宅や職場周辺には防犯カメラがある可能性が高い。だが田んぼの中の道にはない。あらかじめマル害の車のタイヤがパンクするように細工をして、マル害が車を止めたのが防犯カメラのない場所なら決行し、ちがったらまた別の方法を考えた」

「犯人は防犯カメラのみに注意を払い、警察が殺人事件だと疑うのを気にしていないのか」

鮫島はいった。

「自分の姿さえ写されなければつかまらないという自信があるのだろう。同じタイプの凶器を使っているのもそのせいだ——」

藪は答え、鮫島の表情を見て、つづけた。

「北新宿のヤミ民泊で華恵新を撃った」田中たなかのことをいいたいたいのだらう。確かに「田中」も同じ凶器を使っていたが、それは消音拳銃という、日本ではほぼ入手不可能な凶器だったからだ。それに「田中」は逮捕を恐れていなかった。このほしとはちがう」

「だが同じ凶器を使っている」

「同じというだけで同一とは限らない。血痕や毛髪が付着した凶器は処分し、新たなものを入手する。鉄亜鉛ならそれは簡単だ」

「話を整理させて下さい。藪さんの考える犯人は、自分の姿を写されない注意は払っているが、犯行が殺人と断定されることを恐れてはいない。それは逮捕されない自信があるからだというのですね」

阿坂がいった。

「あくまでも仮説ですが、そうです。袖ヶ浦の事案がひき逃げ事故として処理されているのも、ほし
が意図した結果ではないと思います」

藪は頷いた。

「千葉県警に知らせるべきでしょうか」

矢崎がいった。鮫島と阿坂は顔を見合わせた。阿坂がいった。

「難しい問題ですね。担当している木更津警察署員がひき逃げだという判断を下している以上、それ
をくつがえすには明確な証拠が必要です。証拠もなしに管轄外の人間がそんなことをいえば、現場の
人間は不快に思います」

「しかしひき逃げ事件として捜査している限り、犯人を発見するのは難しくありませんか」

矢崎は食い下がった。

「『黒石』の犯行であるという証拠を手に入れるまでは待とう」

鮫島はいった。

「それをどうやって手に入れるのです？」

鮫島が黙ると藪がいった。

「高川に『左慈』が殺されたことを知らせて揺さぶる、というのはどうだ。高川は『左慈』が大木陽
であるとは知らないのだろう。『左慈』が殺されたとなれば、怯えて何か使える情報をよこすかもし
れない。あとは——」

いって口をつぐんだ。

「あとは？」

阿坂が促した。

「『黒石』が別の殺しをするまで待つんです。これに関しては、ひき逃げとして扱われていますが、次の犯行ではそうはならないでしょう」

「おい、誰かがまた鉄亜鈴で殴り殺されるのを待てというのか。次は高川かもしれないのだぞ」
鮫島はいった。

「確かにな。だが凶器に関する情報が集まれば集まるほど、ほしには近づく」
藪はいつて三人の顔を見回した。誰も何もいわなかった。

やがて阿坂がいった。

「高川を揺さぶってみましょう。『左慈』らしい人物が殺されたと教え、ようすを見る」

「それはいいのですが、『徐福』や『黒石』に関する情報を高川はもっていません」

矢崎が答えた。

「高川の知る、八石の他のメンバー、『鉄』や『雲師』、『安期先生』から、この二人の情報が入手できるかもしれません」

阿坂がいうと矢崎は頷いた。

「そうか。その手がありますね」

「それがうまくいかなかったら、高川にパソコンを提出させるという手がある」

藪がいった。

「本庁のサイバー犯罪対策課に八石の掲示板を解析してもらい、メンバーを割りだせないかやってみる。海外のサイバーを経由しているとなると簡単ではないだろうが、ひとりくらい手がかりがつかめるかもしれない」

阿坂は頷き、矢崎を見た。

「高川と接触して下さい」

「しかし——」

矢崎は鮫島を見た。鮫島はいった。

「憎まれ役は俺が引き受ける」

10

高川と再び会ったのは一週間後だった。矢崎によればかなり渋っていたようだが、「黒石」に関する情報があると告げると、会うのを承諾したという。

「具体的な話は一切していません。高川は大木陽の死亡については何も知らないようなので、こちらもいませんでした」

錦糸町の商業施設オリナスの駐車場で待ち合わせたので、今回は車できていた。やがて高川から駐車位置を知らせるショートメールが矢崎の携帯に届き、二人は「フジ緑化」のワンボックスカーに乗りこんだ。

「何だ、新しい情報って」

時刻は午前中で、高川は作業衣ではなくポロシャツ姿だった。

「これです」

矢崎が千葉の新聞記事のコピーを手渡した。

目を走らせた高川が、

「誰だ、この大木って」

と訊ねた。

「我々は『左慈』だと考えています」

矢崎がいうと高川は目をみひらいた。もう一度手にしたコピーを読む。

「ひき逃げにあったのか」

「ひき逃げと考えているのは、頭部に負った怪我がそのように見えるからです。実際は車によるものかどうかはわかりません。硬く滑らかなものが頭頂部に強くぶつかり、脳挫傷を起こしたのが死因というだけで」

矢崎が答えた。高川はまじまじと矢崎を見つめた。

「本当に『左慈』なのか」

「確認はできていません。ただ、この亡くなられた大木さんは大手石油プラントの研究員で、お祖母さんが中国残留孤児であったことがわかっています」

高川は黙りこんだ。目だけを動かしている。

「掲示板にそのような書きこみはありませんでしたか？」

矢崎が訊ねると、

「そのような書きこみって何だよ」

と訊き返した。

「八石の中には、この大木さんと個人的な交友のあった者もいるのではありませんか。交友があれば、死亡を知って、それについて何か——」

「ない！ そんな書きこみは見えない」

高川がさえぎった。

「つまり、『左慈』が死んだことをまだ誰も知らない。殺させた『徐福』以外は」
矢崎がいうと、高川はびくっと体を動かした。

「殺させた？」

「高川さん自身がこの前、話していましたよね。『黒石』は頭を叩き潰して殺す、と」

高川は矢崎を見つめた。

「そうなのか？」

「そうなのか、とは？」

「『黒石』がこいつを殺したのか」

「まだ断定はできません。遺体の見つかった状況では、殺人よりひき逃げの可能性が高いと千葉県警は考えているようです」

矢崎は答えた。

「つまり、犯人は捜してないのか」

「ひき逃げ犯は捜しています」

「だったらつかまえられないということだろ。これが『黒石』のやった殺しだと知らないとすれば」

矢崎は黙った。

「どうなんだ!？」

「組織がちがうので何とも。捜査を担当しているのは千葉県警です」

「ほっておくってことかよ!」

高川が声を張りあげた。

「教えてやればいいじゃないか。殺しだって」

「それには証拠がありません。『黒石』という人物が、頭を叩き潰す殺人をおこなっているという証拠を、我々はもっていない。高川さんから話を聞いただけです」

矢崎が冷ややかにいった。

「ふざけんな！ 作り話なんかしてねえよ」

「しかし高川さんも、この『黒石』の名や顔を知らない。頭を叩き潰して人を殺すという話は誰から聞いたのです？」

「徐福」だ。だいぶ前のことだが、金石を警察にたれこもうとした奴の口を塞いだって話を上げていた。皆の知らないところで自分は金石を守ってるってな。『鉄』がそれに、あんたが自分でやってゐるのかとつっこんだら、守護神の仕事だと答えた。守護神の名が『黒石』だと」

「守護神」

矢崎はつぶやいた。

「『鉄』はなぜつっこんだんだ？」

黙っていた鮫島は口を開いた。高川は鮫島を見やり、頬をふくらませた。

「『鉄』は、そういうのに詳しいんだ」

「詳しい？ 殺人の方法に詳しいという意味ですか」

矢崎が訊ねた。

「そこまではいってない。殴り合いとか、そういうのに慣れてゐるって意味だ」

「あんたと同じでマル走だったのか」

鮫島は訊いた。高川は小さく頷いた。

「俺はケツを割っちまったが、あいつは総長までつとめた」

「総長？ リーダーのことですか」

「そうだ。あの頃はヘッドとか総長とか、呼んでた」

「マル走の総長をつとめたあとは何になった？ 立派なマル暴か？」

鮫島はいった。

「極道になりかけたことはあったが、馬鹿くさいといってすぐにやめた。頭の悪いシヤブ中に、兄貴面してあもしろこうしろといわれるのに我慢できない、といってな」

「やめてどうしたんだ、カタギか？ ちがうだろう」

高川は鮫島をにらみ、黙った。

「ここまで話したんだ。喋って下さい。『鉄』はマル走のリーダーから暴力団に入ったが、頭の悪い兄貴分にこき使われるのが馬鹿馬鹿しくなって組を抜けた。そこでサラリーマンになるとは思えません」

矢崎がうながした。高川は黙っている。

「自分のグループを作ったのだろう」

鮫島がいうと、目だけを動かした。肯定の証だ。

「グループというのは愚連隊か。だから殴り合いに詳しく、『徐福』が実際に手を下しているかどうかを知らうとした。『徐福』自身がやったというなら、真実かどうかを犯行について訊くことで確かめようとした」

鮫島は高川を見つめ、いった。

「確かめる、とは？」

矢崎がいった。鮫島は矢崎に目を移した。

「人を殴り殺すのは容易じゃない。集団どうしの喧嘩などで、木刀やバットを凶器に殴り合ったとし

でも、渾身こんしんの力で人の頭を殴るには度胸がいる。まして殺そうと考えたら、一度ではなく二度三度と思いきり殴りつけなければならぬ。それができる人間は多くない。集団どうしの喧嘩なら、ひとりがひとりを殴りつづけるわけではなく、複数でひとりを殴った結果、死亡する。おそらく「鉄」はそのあたりのことを理解していて、頭を叩き潰して人を殺す度胸が「徐福」にあるのか、確かめようとしたんだ。ちがうか？」

鮫島は高川を見た。

「知らねえよ」

「ここまで話しておいて知らないはないだろう。「鉄」は愚連隊のリーダーだ。今でいう半グレか？ 表向きはカタギを装いながら、裏であくどいシノギをやっている」

「俺は何もいってねえ」

「いい加減にしろ！ こっちは八石のひとりが殺されたとあなたに警告しにきたんだ。次に殴り殺されるのは、この「鉄」か、あなたか。「徐福」は逆らったり、役に立たないメンバーを「黒石」に殺させ、いうことを聞く人間だけの金石を作ろうとしている。それを一番わかっているのはあなたじゃないのか」

高川は大きく息を吸いこんだ。全員が黙りこんだ。

「どうなのですか？」

矢崎がいった。高川は唇をひき結び、目だけを動かしている。鮫島はいった。

「左慈」が死んでも、千葉県警は殺人だとは考えていない。殺人という確かな証拠がないからだ。あなたが頭を叩き潰されて死ねば、我々には殺したとわかる。だがあなたのそういう死体がこのあたりで見つかったら、飛び降り自殺だと本所警察署ほんじょの人間は考えるかもしれない。管轄がちがったら、怪しいと思っても、口をだすわけにはいかないんだ。ただし、あなたが殺される危険を感じていたと、

はつきり我々にいってれば、話は別だ」

「冗談じゃねえ。殺されたあとに、それがどうだこうだいったってどうしようもないだろ」

高川はいった。

「その通りだ。わかっているじゃないか。だから我々は情報を要求しているんだよ。『鉄』が何者で、何をシノギにしているのかを」

高川は荒々しく息を吐いた。

「それが高川さんを守る、唯一の方法です」

矢崎がいった。

「『鉄』の名をいえよ」

鮫島は高川の目を見つめた。

「『鉄』は、『鉄』の名は、白井だ」

「うすいの字はどう書く？」

「白によく似て、まん中が切れている。それに井戸の井」

「こうか」

メモに書きつけ、高川に見せた。高川は頷いた。

「下の名は？」

「ヒロキ。広いに機械の機だ」

白井広機と書いた。高川は頷いた。

「地元はどこだ？」

「埼玉だよ。埼玉の西川口だ」

鯨島の中で記憶が反応した。藤野組の国枝くにえだという幹部を締めあげたときに、西川口の金石の話を聞いたことがあった。

『西川口に尚シヤンで野郎がいた。デートクラブをやっていた。そいつがまだ池袋あたりでくすぶっていた頃、面倒をみてやったことがあって、中国とコネをつけれねえかふったんだ。金石のことは噂で聞いたことがあって、本土といいコネをもってるって話だったからだ。尚は、金石は知らないが、金石に知り合いがいるかもしれない野郎なら教えられるといった。そいつも西川口で中国の女を使った商売をして、尚とは一度、女の引き抜きでもめたことがあった。』

そいつは尚の店の女に、うちで働けば取り分を増やしてやると声をかけたんだ。女は仲間を連れて移ろうとした。尚がその女の顔をはつつて移籍できなくし、女は自殺した。

その野郎の名前は田テイエンといった。尚は、田の野郎を潰してもいいくらいの勢いだった。俺らは田をさらった。上辺うわべは、尚の店のケツモチつてことにして、威せむせば銭につながる話をしてくるだろうと考えたんだ』

その頃は、中国人犯罪組織と日本の暴力団が対立することが多く、力の上で暴力団が優位に立っていた。やがてそれが拮抗きっこうし、双方とも対立ではなく共存をめざす関係に変化していく。

『ところが田の野郎はしぶとくて、ぶっ叩いても組むとはいいやがらねえ。そこでこっちから金石の名をだした。そうしたらあの野郎、血まみれの顔でにたと笑いやがってよ。だったらもつと早くいってくれ、とまで抜かしやがった。そのときに気づきやよかったんだが、俺らは頭に血が昇ってたら、金石の野郎を呼べ、といった』

三十分で三人の人間がやってきた。

『ぱっと見は、中国人にも裏稼業にも見えねえような連中だった。ただ俺らの前じゃ最初、中国語し

か喋らなかつた。シノギの話をする、ちようど近く、中国からM D M Aが屈まくんで卸してもいい、といった。やれやれてなもんで、俺らはほつとした。田を自由にしてやり、悪かつたな、乾杯でもして水に流してくれといった』

直後に男たちは豹変ひょうへんした。拳銃を抜き、やにわに通訳をしていた組員の足を撃つた。

『そこからは日本語だつた。訛なまりも何もねえ、ごくふつうの日本人が喋る日本語だ。「お前たちとは取引しない。文句があるのならいつでも相手になる。そのかわり、皆殺しにするか、される覚悟でこい」と抜かしやがった。俺ら全員その場ですつ裸で土下座をさせられた。その上、ひとりひとりの写真まで撮つていきやがった。殴る蹴るはなかつた。よけい嫌だつたがな。こいつらに半端はんぱはねえつてわかつて』

以来、国枝は金石とかかわらないようにしてきたのだといった。

鮫島は高川に訊ねた。

「田という男を知ってるか」

高川の表情がかわつた。が、

「田なんて珍しい名じゃねえ」

といった。

「俺がいう田は、以前西川口でデートクラブを経営していて、藤野組ともめたことがある。もめた理由は、藤野組が金石とコネを作りたくて因縁いんねんをふっかけたんだ。が、コネを作るところか、田が呼んだ男たちに痛めつけられた——」

「知らねえ！」

鮫島の言葉を遮さへぎり、高川は首をふつた。無視して鮫島はつづけた。

「牙をむく直前、男たちは近いうちに中国からM D M Aが届く、という話を藤野組の連中にしていた。

藤野組はそれにとびついた」

矢崎は鮫島の意図がわからないのか、無言で聞いている。

「いたいことはわかるな」

鮫島は高川を見つめた。

「俺はずっと金石を追いかけてきたんだ」

高川は瞬^{まはた}きし、目を伏せた。

「田は『鉄』じゃねえ。田がその場に呼んだのが『鉄』だ」

「田はどうしている?」

「あいつは、今はカタギだ。システムエンジニアだ」

「それだけか? 他の仕事は?」

「中国人向けのクラブを妹と組んでやってる」

鮫島は息を吐いた。

「『天上閣』だな。妹というのは、日本名田中みさとだろう」

「天上閣」はかつて「ルビー」という名で歌舞伎町^{かぶぎきちょう}にあったキャバクラだった。それを買いとり、中国人観光客向けのクラブに改装したのが金石のメンバーであることを鮫島は陸永昌への捜査の過程でつきとめていた。田中みさとにも会ったことがある。

高川は目を大きくみひらいた。

「そんなことまで——」

「中国からMDMAをもちこむ手配をしていたのはあんたで、『鉄』はそれをさばっていたのだろう。だから、『鉄』の話を我々にしたくない、ちがうか?」

「そうだとすると今さらどうにもならないぜ。もう俺はM D M Aには触ってないし、『鉄』も別の商売をしている」

鮫島は矢崎を見た。矢崎が話についてこれなくなるのを避けたい。

「別の商売というのは何です？」

矢崎は訊ねた。

「それは知らないね」

「知らない筈はないだろう。『徐福』はその商売を狙っている」

鮫島はいった。高川は黙っている。

「あんたはシャブを仕入れ、『鉄』はそれをさばく。先に殺されるとすれば、あんただな。中国とのコネさえあれば、あんたの商売を『徐福』が受け継ぐのは簡単だ」

「高川さん」

矢崎がいった。

「我々はあなたを守りたくてここにいるんですよ」

「守りたいのは君だけだ。俺は、シャブを日本にもちこむような奴が頭を叩き潰されたって痛くもかゆくもないね」

鮫島はいった。

「手前——」

高川はいった。が、声は弱々しかった。

「『鉄』は何の商売をしているんです？」

矢崎が訊ねた。

「時間をくれ」

苦しげに高川は吐きだした。

「鉄」に訊くのか。『あんたのことを警察に話していいか』と？」

鮫島はいった。

「そんなこといえるわけねえだろう」

「鉄」は「徐福」の正体を知っているのか」

「知らないと思う」

「田はどうだ？」

高川は顔をしかめた。

「なんで田がでてくるんだよ」

「俺の勘だと、田も八石のひとりだ」

高川は再び瞬きした。

「あんたは、八石のうち三人を知っていると聞いた。鉄」と雲師「安期先生」だ。鉄「じゃな
いとすれば、雲師」か「安期先生」のどちらかじゃないのか」

鮫島は高川の目をのぞきこんだ。

「本当に嫌な野郎だな！」

高川は顔をそむけ、低い声でいった。

「安期先生」だ」

矢崎がはっとしたように鮫島を見た。鮫島は深々と息を吸いこんだ。

「我々が田を訪ねていって、徐福」や「黒石」について何か知らないかと訊ねることはできる。だ

がそんな真似をすれば、誰が八石のことを警察に話したんだ、という騒ぎになるだろう」

高川はうつむいたままだ。

「だから、あんたが『安期先生』に『徐福』や『黒石』について訊ねろ。助かりたいのなら、そうする他ない」

高川は無言だった。矢崎がいった。

「わかりますか。鮫島さんは高川さんが立場を失わないですむチャンスを提供しているんです。私たちが直接、『鉄』や『安期先生』を訪ねていったら——」

「わかつてる！」

唸るように高川はいった。

「だけどな、簡単には決められないんだ。特に『鉄』とは古い仲間だ。俺がお前らとつながってるなんてわかつたら、絶対許さないだろう」

「『鉄』が『徐福』に反撃する可能性はないのか」

鮫島は訊ねた。高川は首をふった。

「いったらう。『鉄』は『徐福』や『黒石』のことを知らない。だから反撃のしようがない」

「『鉄』には仲間がいるのではありませんか」

矢崎の問いに高川は頷いた。

「舎弟が十人くらいいる」

「十人もいるなら、『黒石』など恐くないだろう」

鮫島がいうと、高川は顔を上げた。

「『鉄』のチームは武闘派で有名だ。俺も、西川口の話は聞いたことがある。やくざくらいじゃ『鉄』

はびびらねえ」

「黒石」はやくざの上ということか」

高川は矢崎に目を移した。

「俺がなんであんたに連絡したと思う。鉄のところのナンバー2が殺られたからだよ。鉄がい
うことを聞かなそうなんで、徐福は先手を打ったんだ」

矢崎の目が真剣になった。

「いつの話です？」

「先月だ」

「殺された人の名前は？」

「橋口。族時代からの鉄の舎弟だった」

「その橋口も頭を叩き潰されていたのか」

高川は頷いた。

「だったら警察が動いている筈だ」

「動いているさ。だが鉄を疑っている。仲間割れで殺したと考えているみたいだ」

「埼玉県警か」

高川は頷いた。

「なぜそれを早くいわなかったのですか」

「いえるわけねえだろう。橋口のことを喋ったら、白井が鉄だって教えるようなものだ」

高川は矢崎をにらんだ。

「だが結局、あんたは我々に話す結果になった。情報の小出しは誰のためにもならないと気づけ」

鮫島がいうと、

「こっちは命がかかってるんだよ！」

高川は目をむいた。

「だからこそです！ 高川さんを守れるのは警察だけです」

矢崎がいった。高川は掌で口もとをおおった。そのまま考えていたが、くぐもった声でいった。

「二日くれ。何とか調べてみる」

「あんたが我々と接触していることを知っている人間はいるか」

鮫島は訊ねた。

「いない。誰にもいえるわけない」

「だが調べることで、それに勘づく人間がいるかもしれない」

「ああ。それはわかっている。だけどどうしようもないだろう。〃徐福〃があんなことをいいたさなけ

りや、八石が誰かなんて気にしたことはなかったんだ」

「その件ですが——」

矢崎がいった。

「なぜ急に〃徐福〃がそんなことをいいたしたのか、わかりますか。たとえば投資に失敗して財産を失ったとか。掲示板で訊いてみることはできませんか」

「下手に探りを入れたら、俺が疑われる」

「ですが〃徐福〃や〃黒石〃の情報は必要です。どんな小さなことでもわかれば、二人を特定する役に立つ」

「わかったよ」

高川は頷いた。鮫島はいった。

「鉄には復讐する気はないのか」

「もちろん、そのつもりだろうさ。だが警察にマークされてるんで、今は潜っている。橋口を殺したのは奴じゃないが、金石のことを説明しない限り、警察は納得しない」

鮫島は矢崎と目を見交した。

「だろうな」

11

二日後、事件の詳細が判明した。被害者は職業不詳橋口朗雄あきお三十四歳、先月の二日に埼玉県戸田市の戸田競艇場に近い親水公園近くで死体が発見された。死因は頭部に激しい衝撃が加わったことによる脳挫傷。検死の結果、何者かに殴打され死亡した疑いが強く、埼玉県警は殺人事件として捜査に着手した。捜査の担当は、捜査一課ではなく組織犯罪対策課で、これは県警が、抗争による殺人だと考えている証拠だった。暴力団員や愚連隊構成員が殺害された場合、所属する団体の情報をもつ組対が捜査にあたることが多い。

本来なら課長の阿坂を通して埼玉県警に提供を要請しなければ得られない事件情報を、矢崎は二日で見手してきた。公安部のコネクションを使ったのだと鮫島は気づいた。刑事警察は縄張り意識が強い。それが近隣の他県警であれば尚さら、管轄内の事件に関する情報を得るのは難しくなる。千葉県警の木更津署ですんなり情報を得られたのは、大木陽の死亡を、向こうがあくまでも交通事故だと考えていたからだ。もし殺人だと疑っていたら、千葉県警の捜査一課を通す羽目はめになったろう。